PROJECT

次世代人類学を構想する

文・写真
杉島敬志

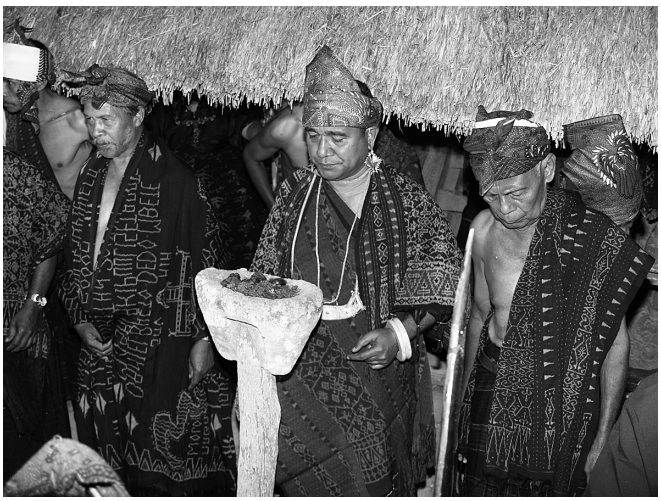
共同研究 ● エージェンシーの定立と作用──コミュニケーションから構想する次世代人類学の展望（2013-2016）

目的

人間の生活の多くの局面は権威者を中心とするコミュニケーションとして成立している。そこでは、強い実在感をもち、また対他的に働きかける、人間以外の存在を含むエージェンシーが定立され、作用する。このように考えるようになったきっかけのひとつは、つぎのような教育現場での経験である。

筆者のつとめる大学には（よその大学でも同様だろうが）、自分の「頭」が悪いと思いこみ、これから自分がおこなう研究に不安をもつ学生がまま入学してくる。そのような学生の指導教員になったとき、筆者は「頭」というエージェンシーが存在も、作用もしないコミュニケーションに学生を引き入れる。すなわち、「頭」の良し悪しは、かりに、そのようなものがあったとしても、研究とは無縁であり、読んだり、調べたり、書いたりする具体的な活動こそが研究の中身であることを説くとともに、短期間に達成できる具体的な目標をしめし、その達成を学生に指示する。学生がこうした短期的な目標を達成しつづければ、かれらは筆者と円滑なコミュニケーションをおこなうようになり、当然にも研究は進展する。その結果、「頭」の良し悪しなどは、どうでもいいものとなる。

エージェンシーとコミュニケーションが表裏一体の関係にあることをしめす例は、ほかにもたくさんあげることができる。現代世界において、精霊や妖術は、呪医を権威者とするコミュニケーションでは人を病気にするエージェンシーとして働くかもしれないが、近代医療関係者はそうした病因を否定するだろう。また、米国の銃規制運動において銃は人を殺すエージェンシーとして定立され、非難の対象となるが、全米ライフル協会はそうしたエージェンシーの定立に強く異議をとなえる。



インドネシアのフローレス島では神の憑代である金の装飾品が大首長を神霊と一体化させるエージェンシーとして作用する。写真は 2006 年 10 月 8 日暁朝の大首長の就任儀礼。大首長に新たに就任した者（写真中央）が、神の憑代である金の装飾品を身につけて、民衆の前に姿をあらわす。

本研究では、こうしたエージェンシーとコミュニケーションとの表裏一体的な関係に着目しながらフィールド調査にもとづく民族誌研究を進めるなかで、エージェンシーの定立と作用について適切に語るための一群の概念を開発する。そうすることで、個別におこなわれてきたモノ、技術、科学、身体、動物などに関する近年の研究と、親族、交換、儀礼、信仰、医療、土地制度などに関わる以前からの研究を架橋し、通地域的・通研究対象的であると同時に民族誌的データを豊かに内包しうる、次世代人類学の理論基盤を整備する。

背景

近年の文化人類学における大きな変化はアクターネットワーク論の深い浸透である。今日の人類学において注目を集めている「存在論的転回」（ontological turn）は、その端的な現れである。こうした研究動向におけるキーワードのひとつは「エージェンシー」である。人間であるか否かを問わず、対他的に作用する存在をエージェンシーとして把握することは、人類学ひいては人文社会諸科学を根本的に変革する可能性をもっている。社会的世界とそこでの人間の行為に視野を限定することなく、人間以外の存在と相互媒介的に営まれている人間生活の様態を研究することが求められるからである。しかし、エージェンシーをめぐる研究の現状は、その大半が理論的考察であることに加え、後述する古典的二元論をうまく回避できていない。

1980 ～ 90 年代の人類学における「ポストコロニアル転回」では、社会を変化させ、歴史を作り出す主体が重視され、文化の本質主義批判が展開された。しかし、社会や文化の概念は放棄されたわけではなく、現在においても人類学の研究対象のイメージを大きく規定している。このことをよくしめしているのは、上記の存在論的転回である。そこでは非西欧的な「存在論」や「世界」、および、その「自立性」が重視されるが、これら（非西欧的な「存在論」、「世界」、その「自立性」）は文化の概念や文化相対主義と類似しており、明確に区別がつかない（Carrithers *et al*. 2010）。

こうした閉塞状況には、西洋思想という広大なコミュニケーションにおいて定立され、作用しつづけている《客体・社会・文化・全体・世界》と《主体・個人・人間・自由・心》との古典的な二元論が大きく影響している。また、そのために、近年のエージェンシーをめぐる議論でも、主体のイメージを投影してモノ（客体）のエージェンシーについて語ったり、エージェンシーを客体と主体とのハイブリッドとして理解すべきことや、モノ（客体）に即して研究を展開すべきことが提案されたりする（Gell 1998; Henare *et al*. (eds.) 2007; ラトゥール 2007 など参照）。

予想される結果と意義

冒頭でのべた「エージェンシーとコミュニケーションと

インドネシア・フローレス島のある村でおこなわれた収穫祭（2012年７月６日深夜）。首長から領民にふるまわれる強い蒸留酒は生命を沸騰させ、「熱く」なった人々は夜明けまで歌い、そして踊る。

の表裏一体性」は、エージェンシーの定立と作用がコミュニケーション外の社会的・文化的な装置によるものではないことを明確にしめしている。それゆえ、エージェンシーとコミュニケーションとの表裏一体性を民族誌研究にもとづいて明らかにすることは、上記の古典的二元論を回避する方向を明らかにするものとして、本共同研究のもっとも重要な目的である。その際、研究の範囲を限定するとともに、具体性をもたせるために、つぎにのべる「コミュニケーションの界面」に焦点をあわせることが必要である。

わたしたちは、たとえ腰痛のように一般的なものであっても、いたるところに伏在する治療法の確立されていない病にかかると、異なる病因（エージェンシー）を定立する治療者（権威者）とのコミュニケーションを開始し、症状が軽減するまで、かれら（を中心とするコミュニケーション）のあいだを転々とする。各療法の権威者は、他の療法を取り入れることもあるが、その効果には概ね冷淡であるか否定的である。この共同研究では、こうした異なる権威者を中心に成立しているコミュニケーション間の界面に焦点をあわせることで、エージェンシーの定立と作用について精細な民族誌研究をおこなう。

また、それにともなって、多数者としての「不定見者」の存在も明らかになる。上の腰痛の例がしめすように、大多数の人々は、権威者を中心とするコミュニケーションへの参加とそこからの離脱を繰り返している定見をもたない人々である。その意味で権威者は少数者であり、多数者であるのは不定見者である。本共同研究では、この点についても考察を進め、人間の生活は、社会や文化の概念によって一枚岩的に描き出すことのできない錯綜、浮動する事態であることを明らかにする。

こうした研究のもつ意義として、つぎの諸点をあげることができる。

エージェンシーへの関心の高まりは近年のものである。しかし、家屋、神器、贈与物、霊質などが人間生活の諸局面を深部で成立させていることを、人類学者は数多く報告してきた。また、哲学者や社会学者は客体と主体の二元論を乗り越えようとする試みを繰り返しおこなってきた。しかし、結果は先述のとおりである。その主な原因は、二元論を乗り越えようとする試みが、二元論を構成する２つの項に言及しながら展開されるために、その過程で両項の実在感はむしろ強まり、議論は二元論の範囲内にとどまることにある。これは、赤と白の絵の具をまぜても、濃淡さまざまなピンク色が得られるだけで、他の色は生じないことに似ている。二元論は乗り越えるべき対象ではなく、回避すべきものなのである。本研究における「エージェンシーのコミュニケーションとの表裏一体性」への着目は、客体と主体の二元論を回避する方策として有効に作用するはずである。

筆者がフィールド調査を重視する理由は、そこでは、古典的二元論と長期にわたって交錯してはいるが、それに起源をもつわけではないエージェンシーの定立と作用が現在においても観察できるからである。他方、上にのべた哲学者や社会学者の試みがしめすように、理論的研究は、必ずといっていいほど古典的二元論の迷路に入り込み、そこからの出口を見つけることは至難である。それゆえ、フィールド調査にもとづいてエージェンシーをめぐる民族誌研究のあり方をしめすとともに、エージェンシーの定立と作用について適切に語るための一群の概念を開発し、国内外の学会等に広く発信することには大きな意義がある。

通信、交通、物流の高速遠距離化にともない、現代世界ではどこにいっても、出所由来の異なるコミュニケーションの界面が複雑に交錯し、多くの人々がそれらへの出入りを繰り返すようになっている。こうした定見をもたない人々が多数派を占め、コミュニケーションが錯綜、浮動する状況を民族誌的に描き出す本研究には、文化や社会の概念によって人間の生活を一枚岩的に描き出す傾向にあった人類学を、現代世界と適合するように、大きく、かつ具体的なかたちで刷新することが期待できる。

臨在する神霊の監視のもと、祭祀家屋でおこなわれる共食のために、徹夜で炊きあげた飯を釜からとりだす女性たち。インドネシア・フローレス島のある村でおこなわれた収穫祭（2012年７月７日正午過ぎ）。この共食中に飯にむせることは、神霊が不快に思っていることをしめしており、むせた者には近いうちに死がおとずれる。

【参考文献】

Carrithers, M., M. Candea, K. Sykes, M. Holbraad and S. Venkatesan. 2010. Ontology Is Just Another Word for Culture: Motion Tabled at the 2008 Meeting of the Group for Debates in Anthropological Theory, University of Manchester. *Critique of Anthropology* 30(2): 152-200.

Gell, A. 1998. *Art and Agency*. Oxford: Oxford University Press.

Henare, A., M. Holbraad and S. Wastell (eds.) 2007. *Thinking through Things: Theorising Artefacts Ethnographically*. London: Routledge.

ラトゥール , B. 2007『科学論の実在』川崎勝・平川秀幸訳　東京：産業図書。

すぎしま たかし

京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科教授。専門は人類学。論文に「漱石の『道草』に描かれる複ゲーム状況とその人類学的意義」（『神戸文化人類学研究』4: 53-66 2012年）、「ニューギニア高地・カラム人の動物への関係行為をめぐる複ゲーム状況」（『南方文化』37: 1-21 2010年）、「複ゲーム状況について──人類学のひとつの可能な方途を考える」（『社会人類学年報』34: 1-23 2008年）など。